

やや離れて1像、東壁寄りに1像の人物像をみることができる。また、それらの周囲に他の線刻を認めることができるが、風化が著しく判然としない。上記の人物像については、頭部から体部にかけてを鋭角をもつ弧状に描き、下顎部を刻して顔面をあらわしている。眉、目尻ともに下り、鼻、口については平行の短線で描いている。

容姿は、首をかがめた状態を呈している。他に、床面より約30cmほど上がった下段、中央部に人物像と長方形の線刻をみることができる。この像は、他の像に比して線刻が細く、シャープである。頭部は、下顎がやや尖がった丸顔を呈し、眉、目、鼻、口ともにはっきりとしている。体部は、膨張する2本の線刻で描かれている。上肢、下肢については表現がない。

人物像の向って右側に縦長の長方形の図形が刻されているが、何を表現しているかは判然としない。

Ⅲ．宮崎地方における横穴及び地下式横穴にみられる壁画

西北九州を初源とする装飾古墳は、現在では、山陰、関西、関東、東北とその分布を広げている。そうした中で、過去、宮崎地方においては、装飾古墳はみられないという考え方が一般的であったが、近年になって徐々にではあるが、その発見例がみられるようになった。しかし、高塚に伴う横穴石室にみられるような初源的な装飾古墳はみられない。それは、宮崎地方には高塚を有する古墳群は多数分布するが、古墳文化伝播の問題や風土上の問題から、数例（西都原古墳群中の「鬼の岩屋古墳」、西都市穂北の「千畑古墳」）を除いて、内部構造に横穴石室を設けていないことに起因するものと思われる。一方、そうした「室」を設けることに類似性をもつ横穴及び地下式横穴の出現によって、装飾が用いられるようになったものと思われる。

そこで、宮崎地方にみられる装飾古墳について、横穴及び地下式横穴の構造上の装飾については除外して、“描かれたもの”という観点から、過去の発見例をみると、彩色壁画（玄室及び羨道内部が朱塗りであるもの）、形象壁画（物を描いているもの）、線刻壁画（線刻で物を表現しているもの）とに大別してみた。分類法には種々あろうかと思うが、宮崎地方で発見されている壁画を整理する意味から上記分類を行った。

1. 彩色壁画

これは、玄室の壁及び羨道の壁に朱を塗って装飾味を出すとともに、葬礼に対する除魔をもかねたものと思われる。こうした例は、東諸県郡国富町の「飯盛地下式古墳第1号」（註2）（玄室北壁のみにみられる）、宮崎市下北方町塚原の「下北方地下式横穴第5号」（註3）（玄室壁面全体にみられる）、西都市上穂北「上穂北横穴第23号」（註4）と、西諸県郡高原町大字広原字旭台の「旭台地下式古墳第13号」（註5）の4例が知られている。

2. 形象壁画

これは、家屋の構造を溝状の掘り込みや朱線によって表現したものである。

溝状の掘り込みによって棟や檼^{たき}状を表現したものに、国富町字狐平の「六野原地下式古墳第2号」（註6）がある。また朱線によって、束柱や屋根^{つか}根葺きの状況を表現したものに、西諸県郡高原町大字広

原字旭台の「旭台地下式古墳第6号、第7号、第12号」(註5)がある。また、未報告ではあるが、昭和53年8月に発見された西諸県郡野尻町三ヶ野山大萩の「大萩地下式横穴(仮称)」(註7)にも類例の壁画が描かれており、5例が知られている。

3. 線刻壁画

これは、玄室内の壁面に端部の尖がった施文具によって線刻された壁画であり、鳥をあらわしたものと、人物像をあらわした2類がみられる。

鳥をあらわしたものは、過去、宮崎県においての壁画としてとりあげられていた唯一のもので、宮崎市大字芳士字祝田の「祝田横穴南1号」(註8)にある。また、人物像をあらわしたものは、本報告のものと、西都市上穂北の上江地区に存する「上穂北横穴第33号」(註4)“円文の刻画がある壁画横穴である”とされているが、図版からすると、人物像を描いているようにも思える。しかし、この横穴は開口横穴であり、学術調査も行なわれていないため定かなことはいえないが、線刻壁画は4例が知られている。

以上のように、宮崎県においても時期の差こそあれ、13例(未確認のものが数例あると思われる)の装飾古墳が発見されており、「装飾古墳」についても、見なおす時期にきている。

今後の調査によって、その例も追加され体系付けられるものと確信する。